

れき ぶん
となん歴民だより Vol.4

Morioka tonan folklore museum

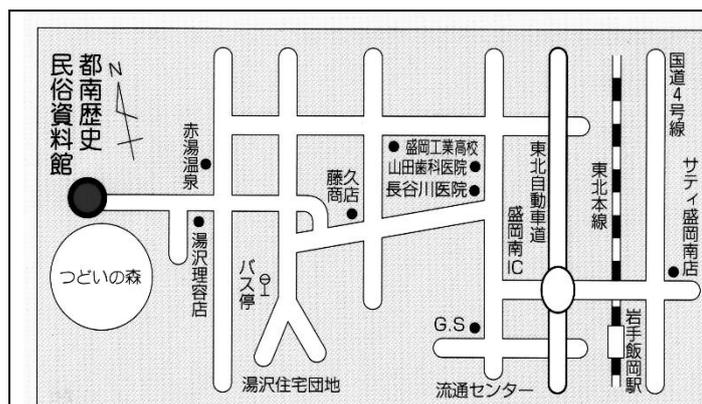
平成17年9月25日発行

発行 盛岡市都南歴史民俗資料館 盛岡市湯沢 1-1-38 TEL019-638-7228



研修会「史跡・文化財めぐり」の見学風景

MAP ☆ACCESS



— もくじ —

- ・機織りの糸かけ
- ・史跡・文化財めぐり報告
- ・体験学習報告
- ・指定文化財紹介④
- ・これからの行事予定
- ・民具・農具を貸し出します
- ・資料は語る④
- ・となんの昔ばなし④

○利用案内

開館時間 午前9時から
午後4時まで
入館料 無料
休館日 月曜日
(休日に当たるときは、
翌平日)
年末年始

開催中行事（9/15～11/30）

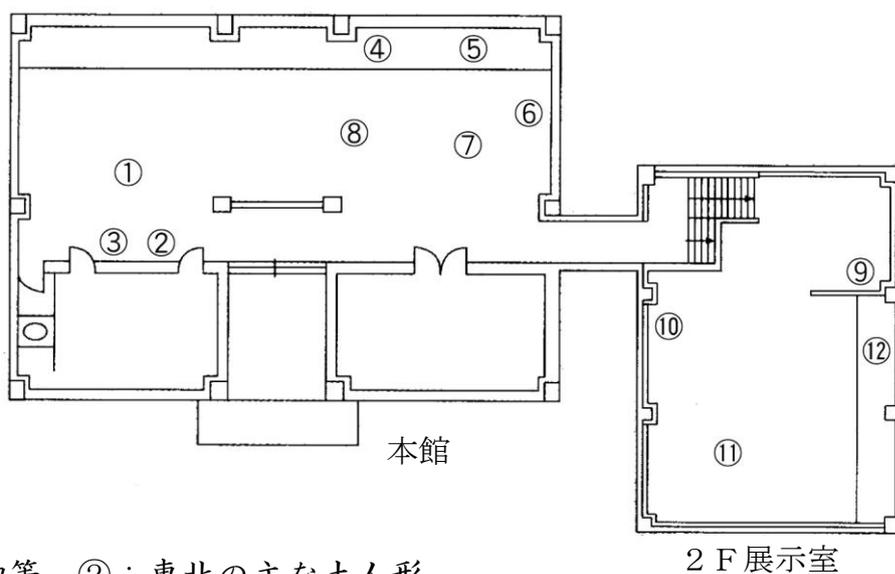
特別展「土人形」展



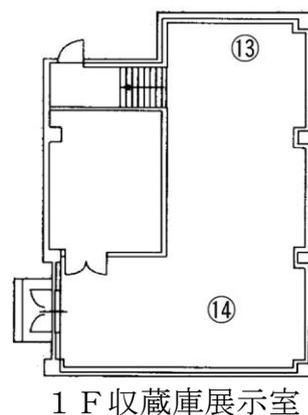
土人形は3月の桃の節供で飾られた雛人形だけではなく、当時の世相を表すものや昔の出来事、おとぎ話の主人公、動物など様々なものがあります。このような土人形を題材とした特別展は、これまで多くの資料館や博物館において行われておりますが、今回の当資料館の特別展では、「土人形は当時の生活スタイルが描かれている」というところに着目し、所蔵の民具・農具資料を併せた展示を行うことによって、双方のより深い理解を目的としています。さらに、特別展と言うと、特別展示室など決まった場所に資料を集めて展示することが一般的に行われておりますが、今回の特別展では、限られた空間ではできない展示であるため、館全体で資料の展示を行いました。当時の生活のスタイルを表す土人形と、そこに描かれた民俗資料を併せた展示によって、当時の様子を知る手がかりとしての土人形を再確認していただきたいと思っております。

スタイルを表す土人形と、そこに描かれた民俗資料を併せた展示によって、当時の様子を知る手がかりとしての土人形を再確認していただきたいと思っております。

土人形展示配置図



- ①：縁起物等 ②：東北の主な土人形
- ③：体験学習「土人形の絵付け」
- ④：甲冑等の武具 ⑤：袴 ⑥：教科書
- ⑦：子供の玩具 ⑧：女性用装飾品
- ⑨：商売に使う道具 ⑩：子守り
- ⑪：落雁の鯛型 ⑫：信仰
- ⑬：依抱き ⑭：魚屋





盛岡市所在指定文化財紹介 ④

盛岡市指定文化財 オシラ神

昭和48年(1973)7月20日指定 盛岡市

オシラ神は、民間信仰のご神体で、多くの場合旧家に伝承され、「オシラサマ」「カシボトケ」などとも呼ばれています。ご神体には、桑の木が使われていて、毎年一定の日に新しい布切れを一枚着せ足す「オシラ遊び」というお祈りの行事がもたれました。大々生家には六体が保存されています。

史跡・文化財めぐり「歴史の街道散歩」

(6月24日) 報告

～塩の道・鉄の道～

今年度の第1回目の史跡・文化財めぐりは、本町通の牛馬宿から玉山村の一里塚などを巡り、野田街道を通して岩泉へ向かうルートで行われました。絶好の日和に恵まれ、常時公開していない岩泉の醸造所を見学することもでき、参加しがいのある見学会となりました。なお、9月に行われた第二回史跡・文化財めぐりは次号で報告します。



体験学習「土人形の絵付け」

(7月23日) 報告

毎年民俗資料館では体験学習を行っています。去年までは「土器作り」でしたが、本年度は「土人形の絵付け」を行いました。参加者は、実物の土人形を見ながら思い思いのデザインをし、慣れない手つきで絵付けを行っていました。



昔の暮らしを見つめてみよう

—学校や地域活動団体などへ—

農具・民具を貸出します!

当資料館の、数多くの民俗資料を学校や子ども会、地域活動などの場に広く役立てていただくために、所蔵資料の一部を貸出します。

長い年月のあいだ使い込まれてきた資料一つ一つにはその家々の暮らしぶりや手づくりの道具に対する使い手の愛着が見え、手にとってはじめて知ることがとてもたくさんあるものです。

資料の借受を希望する場合は、当館にご連絡下さい。



資料が身近になると
いろいろなことがみえてくる

資料の活用法

—学校教育の現場で—

実際の資料を観察することによって、写真や文章などからでは分からない、その資料のより詳しい作りや機能なども発見できます。さらに、手に触れることによって、より当時の生活を実感できます。



—高齢者ケアの現場で—

昔懐かしい資料を再び手にすることによって、その当時の情景をありありと思い出すきっかけになり、さらに自分の思い出を他者に聞いてもらい、適切な返答を受けることによって、コミュニケーションの活性化や情緒の安定につながります。

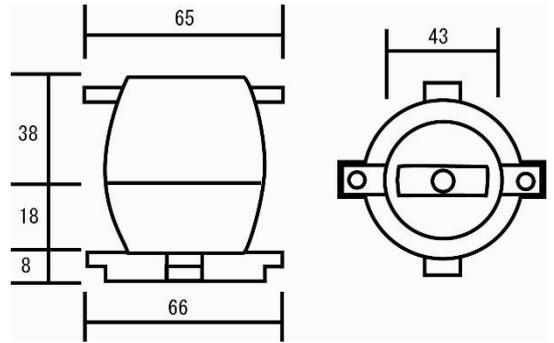




土摺臼



下の臼に埋め込まれた歯



側面観

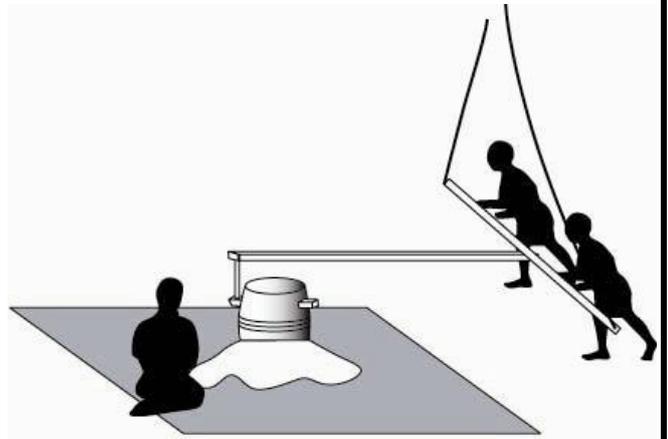
上面観

計測値 (単位はcm)

この道具の名前は土摺臼(どずりうす)と言い、上下の臼の接する部分を塩を混ぜた土で固め、杓などを細く割った歯が埋め込まれています。この道具は、前号の木摺臼(きずりうす)と同様、上部の臼が回転することによって、その接触面で米から籾殻をとりのぞく構造をしています。

籾すり作業にはやり木を押す者二人と、臼の近くで籾を補給したり、臼の回転を助けるもの一人が最低必要でした。

この土摺臼は木摺臼よりも遅く、江戸時代から使われはじめましたが、当初は米が碎けてしまったり、米粒に傷がつきやすいなどの欠点があり、すぐには普及しませんでした。その後の臼自体の改良などによって、徐々に広まっていきました。従来の木摺臼にくらべて三倍効率的に籾殻を除去できると言われます。



参考資料 / 名古屋博物館 「臼-食の道具-」 1979

となんの昔ばなし④
『坊主子堤(ぼずこどて)』

三本柳の畑沼の北の方すぐ近くに堤防があり、坊主子堤といっています。藩政の頃に、北上川の洪水をふせぐためにできた堤防ですが、そのころとしては大きい工事で煙山、不動方面からも人夫がきて村の土木工事をしたといわれています。大工事でもあるし、また出水がある度に流されるものだから、頑丈にするために人柱(生きた人を土に埋めて神へのいけにえにすること)がよいということになりました。たまたま、そこを旅の僧が通りかかったので、その僧をとらえてむりやり人柱にしてしまいました。残酷なことですが、村を救うためには仕方のないことと思っただけでしょう。

そう言う事があって、工事が完成してから、この堤防の名を「ぼず子どて」と呼ぶようになりました。(終)

■ 出典 『となんの民話』
(都南歴史民俗資料館)